

序

二〇二〇年、「新型コロナウイルス感染症」(Covid-19)の急激な蔓延(パンデミック)のもたらした暗鬱な雰囲気、世界を覆いつくしていた。日常が一挙に非日常に転じ、非日常が突然日常化するという状況に、ひとびとはいたずらにとまどうのみで、いまだにそれにたいする抜本的な対策をみいだせずにいる。そのような状況のなかで、カミュ(Albert Camus, 1913-1960)の『ペスト』(La Peste, 1947)やデフォー(Daniel Defoe, 1660-1713)の『ペストの記憶』(A Journal of the Plague Year, 1722)などがよく読まれているという。

わたくし自身は、何年かまえにみた二本の映画、ながいあいだ聞こえていた虫の木の木を齧る音が突然途絶えたという、自然の微細な変化がきっかけとなって、日常が加速度的に崩壊してゆくありさまを語る

『トリノの馬』(A torinoi lo, 2011)と、ひとびとがへだたりなく共生し、まなざしをかわし、諒解しあうという、いわばユートピア的な日常のくらしをえがいた『ル・アーヴル』(Le Havre, 2011)を、なんとなく思い出していた。記憶をたしかめるために、二本の映画についてそのころに書いた断片的な覚書を読みなおしながら、あらためて「日常」という問題について考えようとしたものの、問題が問題なだけに、これといった結論に達するわけでもなく、思考はいたずらに迷走をつづけるだけだった。「断章(Ⅰ)」と「断章(Ⅱ)」は、いわばその迷走の軌跡とでもいうべきものだが、当然のことながら、それは一般的な「論文」のもつべきまとまりも規模も欠くことになった。自由に——気ままに——書かれた、規模のちいさなテクストという点では、音楽にいう「バガテル」に通じるかもしれない。

「バガテル」——おもにピアノのために書かれた、特定の形式をもたない、自由な小曲を指す。ベートーヴェン(Ludwig van Beethoven, 1770-1827)には何曲かのバガテルがあるが、そのなかでもっともよく知られているのは、『エリーゼのために』(Für Elise)とよばれている曲(Bagatelle, a-moll, op.173, 1810)ではないだろうか。なお「バガテル」(la bagatelle)とこう語そのものに、つぎのような意味がある——「ほとんど価値もなくまた役にもたないもの」(Objet de peu de valeur et d'utilité)。(Petit Robert)

ふたつの「断章」に共通する「映画と日常」という主題は、おのずから「物語と日常」というよりおおきな主題をあらわしだすことになった。その主題を、ひとりの卓越した物語作家、宮部みゆき（一九六〇—）に動機モティーフをかりることによつて、すこしばかり展開しようとしたころみの痕跡が、「断章（Ⅲ）」と「断章（Ⅳ）」である。ここで当然、なぜ他の作家ではなく宮部みゆきなのか、という疑問が生じるだろう。家族のなかに宮部みゆきの小説を好むものがおり、新刊が出るたびに買ひもてくるので、なんとなくその小説に親しんではきたものの、愛読者というにはほどとおいのだが、この作家があるインターヴューのなかで、自分自身を「エンターテインメント作家」と、あるいは「職業作家」と明確に規定していることを知り、またある意味では「物語」についての「物語」とでもいうべき『英雄の書』（二〇〇九年）に接して、格別の興味をいだいたことが、宮部みゆきを動機としてえらんだきっかけだった。

「断章（Ⅲ）」は、宮部みゆきの旺盛な——ときに貪欲とすらおもわれるような——創作意欲の根柢にあるものを探ろうとするところみからうまれ、「断章（Ⅳ）」は、宮部みゆきのある小説をとおして、「連作」という作品のありかたを、そして「エンターテインメント」としての小説の特質をとらえようとするくわだてのもたらしたものといえるだろう。「断章（Ⅲ）」では、物語を「書き」そして「読む」ことが中心な話題となっており、「日常」の問題は表面からすがたを消しているが、ある意味では一種の物語論として、他のみつつの「断章」にたいする序章という位置にあるともいえる。「断章（Ⅳ）」

では、「エンターテインメント文学（娯楽文学）」の特質をとらえるうえで、「日常」の問題が主要な手がかりのひとつになっている。

二本の映画作品と宮部みゆきという作家をおもな動機としてはいるものの、これらよつつの「断章」は、作品論、作家論であることをいささかも意図していない。選ばれた主題ないし動機は、そのいずれも正統的な学（美学）の問題圏をかなり逸脱しているかもしれないが、にもかかわらず目ざされたのは、それらについての美学的な思考であった。とはいえ、主題ないし動機のあり方からいって、その思考が正統のそれからかなりずれているのも、ある意味では余儀ないことであり、それはまたそれなりに自覚されていたことでもあった。

ところで、「断章（I）」ではロラン・バルト（Roland Barthes, 1915-1980）の、「断章（II）」ではニール・チェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）の、「断章（III）」ではバルトとラカン（Jacques-Marie-Émile Lacan, 1901-1981）のテクストがそれぞれ原文で引用され、しかも専門的な研究者によるすぐれた訳業があるにもかかわらず、わたくしの手になる訳文がつけられている。このことは、「断章」というありかたにはなじまないかもしれないが、これらのテクストは、それぞれの「断章」のいわばきっかけになり、あるいは基礎になったものであって、わたくしがそれをどのように読んだかをしめすこ

とが、これらよつつの「断章」にとつては不可欠だと考えたからにほかならない。なお引用原文と訳文のあいだに、必要と思われる語句の簡単な説明を挿入してある。

引用文中の／は改行を、……は省略を、〔 〕は引用者による説明ないし補足をしめし、訳文中の傍点は原文のイタリック字体に対応している。固有名詞には生没年ないし発表年を、必要な場合には原綴をつけてある。なお引用註は、「断章」というありかたに即して、必要最低限におさえてある。